

親の問題対処方略と青年のひきこもり傾向及び自己効力感との関連

—青年が認知する親の問題対処方略に着目して—

村 瀬 凜

就学や就労といった社会的場面に参加せず、長期に亘り家庭内にとどまり続ける「社会的ひきこもり」と呼ばれる問題が我が国の社会問題の一つとして注目を浴び、その予防的視点や早期支援の重要性が指摘されている。ひきこもり問題を抱える家庭では、家族がひきこもり問題を解決しようとしてとる問題対処行動がかえってひきこもり者のネガティブな反応を引き起こし、問題の長期化を招くといったコミュニケーションの悪循環が見られる。また、非受容的で子どもの主体性を尊重しないような親の養育態度が子どもの自己効力感を低下させることや、ひきこもり問題と自己効力感の低さとの関連がしばしば示唆されている。このことから、青年のネガティブな反応を引き起こすような親の問題対処方略は、青年の自己効力感を低下させ、それによって青年のひきこもり傾向が高まると考えられる。そこで、本研究では青年が抱える問題に対する親の対処方略として、(1) 叱咤激励、(2) 親自責、(3) 無関心、(4) 見て見ぬふり、(5) 空回りという5つのパターンを想定し、予備調査を通してそれらについて測定する尺度の項目を作成した。本調査では、①青年自身の問題に対する親の問題対処方略について測定するための尺度を作成し、その信頼性、妥当性を示すこと、②親の問題対処方略が、青年のひきこもり傾向及び自己効力感とどのように関連しているかを明らかにすることを目的とした。

予備調査はWeb アンケートを用いて実施し、133名の大学生から回答を得た。本調査は質問紙とWeb アンケートの2通りの方法で行い、270名の高校生及び大学生から回答を得た。親の問題対処方略尺度について因子分析を行った結果、「親主導」「主体性の無視」「自責」「無関心」の4因子解が採択され、妥当性と信頼性が確認された。学校形態ごと、性別ごとにそれぞれ2群に分けて t 検定を行ったところ、一部の得点の平均値に有意差が見られたため、その後の分析は学校形態差や性差を考慮して行った。重回帰分析及び多母集団分析の結果、ひきこもり傾向と自己効力感との間に負の関連があることが明らかとなった。また、青年が認知する親の問題対処方略とひきこもり傾向との直接的な関連や、自己効力感を介した間接的な関連は、学校形態や性別によって差異が見られた。高校生群や男性群では「親主導」「主体性の無視」が、大学生群や女性群では「自責」「無関心」が直接的及び間接的にひきこもり傾向の高さを特に予測していた。加えて階層的重回帰分析を行ったが、親の問題対処方略と自己効力感との交互作用効果は見られなかった。今後は、実際にひきこもり問題を抱えている家族を対象にそれらの関連について詳細に検討していくことで、よりひきこもり問題の現状に即した知見が得られると考えられる。